巻頭言

性善説と性悪説

学校長　岡田樟雄

世の中にはよいことをする人もいれば，悪いことをする人もいる。また同じ人間がある時，ある所ではよいことをしながら，別の機会には悪いことをすることもある。このような人間が集団をなして生活しているのであるから，人間の性とは何であるかと考えたくなってくる。これについては孟子の「性善説」，荀子の「性悪説」がよく知られている。

この両説は倫理観に関する立場を論じたものであり，学校教育に直接関わるものではない。しかしこの両説を学校教育に敷延して考えることも無意味ではあるまい。実際，我々教師が子どもの性に対して性善説に立つか，性悪説に立つかによって，教師の教育に対する姿勢が大きく異なってくるからである。

ここで，古典的な性善説，性悪説に言及するのは，今日の学校教育における子ども観に，それらに似たものを感じるからである。最近の教育界では「自己教育力の育成」とか「生きる力の育成」などという文言が飛び交い，それらが教育界の急を要する課題となっている。これらの文言をきいていると，その中に含まれている「育成」という言葉が気になるのである。その言葉は，子どもは生まれながらに自己教育力や生きる力はもっていない，だからそれらを教育の力で育てなければならない，という意味が込められているようにきこえるからである。子どもは生まれながらに自己教育力や生きる力をもっていないという立場は，自己教育力や生きる力という価値のある力を欠除しているという意味で，「性悪説」ととらえることができるであろう。そうすれば「自己教育力の育成」「生きる力の育成」という文言は，性悪説の立場に立っているとみることができる。これに対して，子どもは自己教育力や生きる力を生まれながらに持ち合わせているという「性善説」の立場に立てば，上の文言はそれぞれ「自己教育力を生かす教育」「生きる力を生かす教育」と書き直さなければならない。

本校ではこれから「自立」というテーマで小学校教育に取り組むことにした。身の回りのことが自分でできるというような意味での自立は家庭教育の問題であり，学校教育では認知的活動における自立が主たる問題となる。自立についても上と同様に，性善説をとることも，性悪説をとることもでき，それに応じて指導理念が異なってくる。

子どもは強力な自立する力をもっているという「性善説」を私に教えてくれたのは，ガテーニョ氏(注1)であった。氏は子どもが母国語をたったの1～2年の間に，自分の力だけで身につけるという事実に驚嘆し，その力を教育の原点に置こうとしている。我々は，子どもが母国語をマスターするのは本能であるかのように考えている。ところが子どもにとってその学習は，我々が外国語を学習するのと同じ程の生みの苦しみの過程であると理解すれば，子どもに対する見方が変わってくる。我々は中学校から大学までの長い間，教師の指導や教科書を通して英語を学習してきた。しかしほとんど何も身についていない。ところが子どもは自分の力だけで，誰を頼りにすることもなく，誕生直後には単なる雑音にすぎない回りの人達の会話の中に語を見いだし，それに意味を与え，自分の思いを文法的に正しく発音できるようになる。これこそまさに，認知的活動における自立の典型的な例といえるであろう。

注1　ガテーニョ（土屋澄男訳）：赤ん坊の宇宙，リーベル出版，1988年.